竹千代賞

フェイク

齋藤風花

この物語はくだらない妄想であり、実際の団体・人物・物体・思想・事件・事故とは一切合切完膚なきまでに徹頭徹尾にからっきしに全部全部全部まるっきり関係ありません。
ありませんったら。

陰謀論というものがある。
言って仕舞えば荒唐無稽極まりない、御伽噺にすらなれぬような、電子世界のそこかしこに広がる、単なる嘘っぱち。やれ、政府がワクチンが電波がなんだかんだあーだこーだ。この地震は政府が意図的に仕組んだ人工地震なんだ！　新しい移動通信システムによって我々の思考が盗聴されている！　新型ウイルスのワクチンはマイクロチップが入れてあって打つと操られてしまう！　あの悲惨なテロ事件を政府は察知していたのになんらかの理由で見逃した！　地球温暖化なんて実際は起こっていない！　ヒト型爬虫類が各国の重鎮に化けて

人類を支配している！　なんて。
あるいは真剣に。あるいは冷静に。あるいは面白半分に。あるいは憤怒しながら。あるいは呆れつつ。あるいは関係ありませんとでも言いたげに。
人はそれを語る。
「とは言ってもさあ」
と、俺は思う。思った上で口に出した。この人気のない、ぼろっちい図書館の自習スペースで、世界史の教科書と睨めっこの最中に、なんとなしに現実逃避を含めた自分語りだった。
「とは言っても、なんや？」
ご丁寧に返答してくれたのは真正面に座る我が幼馴染、三条である。高校を機にやっとのこさで離れ離れとなってしまった腐れ縁。幼稚園から中学校までの付き合いだ。なっがい。十七年程度しか生きていない若造からするとものっそい長い。
人生の大半を、俺はこいつと過ごしてきた。
現在進行形で過ごしている。
「とは言っても、信じるやついる？」
俺は言葉の続きを言った。信じるやつ。何をって、そりゃ陰謀論に決まっている。バカ正直に、ご丁寧に、純粋無垢に真正面から信じる人間が、いるのだろうか？　政府が悪くてワクチンが危なくて通信機能が我々を操っていて、挙句の果てには爬虫類。カメレオンが可哀想だとは思わないのだろうか。
「いるから広まってるんやろなあ」
「身も蓋もなーい……」
「ほら、問題解く。なんでウチが自分専属のカテキョやってっか考えてから無駄話しようや。落第生」
「うっせえ。どうせ大学なんて行かねえから関係ないもんね」

「大学行かんのに留年したら末代までの恥やで」
「聞こえない」
「耳鼻科行け」
無駄話終わり。
俺は問題に向き直る。世界史。部屋の隅に溜まった週刊雑誌ぐらい興味ない。つまり、それなりの知的好奇心はあるけど勉学として学ぶとなると頭に入ってこない。あー、もう。誰だお前のオンパレードだ。急に出てきて王を処刑するんじゃあない。
「陰謀論やけど」
終わったと思っていた無駄話は続行中だったらしく、三条が会話を続けた。相変わらず呑気な、あっているのかわからない関西弁だった。こいつの出身ってフツーに関東とか、都会じゃなかったっけ？　幼稚園の頃近所に引っ越してきたこいつは、シティガールというやつじゃなかったか。そこらの記憶は曖昧模糊としている。とりあえず、お笑い芸人のようなコテコテの関西弁を喋るようなやつじゃなかったと思う。朧げな記憶では、三条は可愛らしく喋っていた。あんがとさんじゃなくてありがとうだった。自分じゃなくて君だった。すまんじゃなくてごめんねだった。
ような気がする。
「なんで広まった思う？」
「……なんでか？」
なぜ。どうして。三条の過去に気を取られていた俺は、思考を無理やり陰謀論に切り替える。うーむ、さっぱり。あんな与太話、信じるやつも信じるやつだし、作る方も作る方。面白い話だ、小説家にでもなったらどうかねって感じだ。
「さっぱりわからん。陰謀論にハマったことないし」

「ハマってたらやばいやつや。……ま、お勉強はこんぐらいにして、陰謀論について説明したる。うれしーやろ？」
「わー、頼んでないです先生」
「やる気があるようでセンセー嬉しいわあ」
「一言も言ってないんだけど」
「聞こえへん」
「耳鼻科行け」
はあと三条がため息を吐いて、俺に向き直る。教科書をパタンと閉じる。
「陰謀論ってのは……まあ、自分も思っとる通り一目で嘘だってわかるような話なんやけど、それでも信じる人間ってのは一定数いる。じゃあ、それはどんなやつかってのは、二パターンに分けられるわけや」
教科書の隅っこをいじりながら、三条は続ける。ピンと人差し指を立てる。
「ひとつめ、深く考えへん人間」
続いて中指を立てる。
「ふたつめ、社会に不満を持っとる人間」
ほうほうと、俺は形だけでも頷いておいた。へえ、そうなんだと素直に感心した。こんな、場合によってはデリケートな話題だって学生の暇つぶしトークの話題にはなってくれるのだ。
「深く考えへん人間は己の主義主張を持っとらん。フォロワーが何人いるこやつが言っとるから、あの有名な教授が発表しとるから、みんなみんな賛同しとるから。顔も見たことないインフルエンサー信じ込んで、その教授がほんまに言うたか調べもせず、『みんな』が同調しとるから、信じ込む。赤信号はみんなで渡れば怖くないっちゅう話やな。いや、御本人は赤信号と思ってへんのやろけど」
くすくす笑いながら三条は言う。性格の悪さは相変わらず……と言いたいところだが、前から性格が悪かっ

ただろうか。先ほども思ったが、今のこいつは変わっちゃいないのではなく、俺が変わったことに気づけていないのではないか。

「んで、社会に不満を持っとる人間な。こいつらは己ばっか不幸やと思っとるし、その不幸は己のせいじゃないと思っとる。信じとる。そこで政府があの地震をとか、実はエイリアンがとか、そういう攻撃しやすい対象を作ってあげるんや。もう入れ食い状態やでえ。みんなの不幸はこいつらのせいやと正々堂々大手振って攻撃できるんやからな。正義のヒーロー気取りや。ああ、それもあるな。この現代社会に燻る、承認欲求ばっかり強いやつは、注目を浴びたいやつは、簡単に引っかかる」

「じゃあ……なんだ。陰謀論を信じてるやつは、総じてすぐ鵜呑みにする承認欲求モンスターなのか？」

「ちゃうちゃう。ほんまの親切心で発信しとるやつもおるよ？　このワクチンを打たないでくださーい、危険ですーってな。みんなを助けたい一心で、んなことをばら撒くんや。あとは……そやな。『世界の真実』とやらを知って、単純に周りに広めたくなっちゃっとるやつもいるかもしれん。一般人の自分がたどり着いたこの世界の闇！　ってな。ほら、人にもの教えるんきもちええやん。自分だってテストでええ点取ったら周りに教えたくなるやろ？」

「いい、点……？」

「んな初めて聞いた言葉みたいな反応すんなや。将来心配になるやろ」

「ジョーダン。……まー、気持ちはわかる。誰も知らないことを周りに教えたい。チヤホヤされたい。みんなを助けたい。真実を広めたい。……そんな正義感に溢れた真摯で健気な人たちがいるってこった。傍迷惑だな」

まったく、インターネットとは恐ろしい。自分が見たい情報しか見られないと言うのはなかなかどうして不便である。一回ハマったら抜けられない。関連情報で溢れたタイムラインは変わらない。いいねを押すたびに増えていく。思考が変わっていく。変えられていく。

そうならないようにしないと。

……最近。妙に多くなったけど、本人が信じておらずいいねも押していないのならモーマンタイだ。多分きっとおそらくメイビー。

「んで、なんで急に？」

三条がこてんと首を傾げた。そりゃそっか。腐れ縁が唐突に『陰謀論を信じてるやついるか？』なんて質問してきたら、しかも勉強中に聞いてきたら、疑問に思う。なんだこいつである。俺だって三条が聞いてきたら『なんだこいつ頭でも打ったか？』と思うだろうし。

だから、質問自体は至極真っ当。

なんの疑問もない、なんの矛盾もない、なんの違和感もない、なんの疑心もない、単なる質問。

質問をしたのが三条じゃなけりゃ、ほんと、ありきたりな質問だ。

「なんで、と言われても」

俺は言葉に詰まる。え、わかってて言ったんじゃないのか？　聡明で、博識で、知的で、賢くて……世の中全てお見通しみたいな態度で暮らしてるこいつのことだから、俺が浅知恵働かせてした質問の真意ぐらい、気づいていると思い込んでいたけれど。

まさか。

「言われてもじゃないやん。理由言うてや。りーゆーうー。まさかやけど、ほんまに興味本位なんか？」

気づいて、ない？

あの三条が、俺の真意に気づかない？

ばか言え、そんなはず、ないだろ。

「……理由」

「そ、理由。別に言いたくないんやったら言わんでええよ。プライバシーの侵害はしない主義なんや、うち」

プライバシー。

ああ、そうか。俺の方が最低だったわけだ。いや、不可抗力なんだけど。むしろ知りたくなかったし、知るつもりもなかったし、知っても何も言わない気でいたし。ずっと、三条との関係を、心地よいぬるま湯のようなこの、過度に干渉し合わない関係を、このまま縁が切れるまでずーっと、長ったらしく続けていこうと考えていた。

それでも。

好奇心とやらは、正義感とやらは、余計な心配とやらは、いつだって人間を突き動かす。

「んとさ」

「なんや？」

「これ」

俺はスマホを取り出す。ギガをケチることに関しては右に出る者がいない俺だが、この時ばかりは必要経費。俺は動画投稿サイトのアイコンをタップして、最近チャンネル登録した配信者の動画を再生する。

映し出されたのは、なんとも可愛らしい二次元なアバター。

聞こえてきたのは、呑気な関西弁。

『どもどもー。迷える民衆ちんに世界の真実をお届けする救世主、惨状ちゃんやでえ。今日は新型ウイルスのワクチンとその危険性、そして仕組まれた陰謀について話していこう思っとるよー。ほんじゃ、チャンネル登録高評価、あと各ＳＮＳのフォローよろー』

三条は何も言わない。言えないのか、言わないのかは知らない。俺は三条の本心がわからないし、わからなくていいと思っている。そのくらいの距離感でいたい。

とにかく。

三条は無反応だった。

顔色一つ変えず、眉を顰めることもなく、何も発さず何も反応せず、弁明も惚けも焦りも懇願もなくて。た

だ、再生される画面をじいっと見ていた。
俺は、カラカラに乾いた喉を駆使して、三条に問う。
「これ、お前だよな」
ふうん、と三条は呟く。俺に世界史を教えているときとなんら変わらない声色で顔色で、日常生活の延長線にでもいるかのように、答えた。
「せやけど？」

三条について話そう。
彼女はいいとこのお嬢様である。当たり前のようにいい学校に行き、当たり前のようにいい会社に就職し、当たり前のように幸せになる、そんな一族の末裔である。エリートコースまっしぐら。親の親の親の親の……とりあえずご先祖様が引いた線路の上をひたすらに走り続ければ、世間一般の幸せが簡単に手に入ってしまうような、家系。お金持ち。成功者。成金……ではないけれど。とりあえず、会社でも経営しているのかは知らんが、金持ちだった。幸せだった。この世の中、金で解決することを忌諱するくせに金がないと出来ないことが多すぎる。だから、選択肢の数という意味でも、彼女は有り余るほどの選択肢を与えられていて、だから、幸せだった。
他人から見りゃ、そりゃ幸せに見えるだろうよ。
彼女は不幸だった。不幸で不幸でたまらなかった。元々幸せが確定していたからより不幸になった。より悲惨に不幸になってしまった。探せばそこら辺に転がっているような不幸の塊に、彼女は押し潰されていた。
可哀想なことに、彼女は両親に恵まれなかったのである。
彼女は親の言いつけで、中学受験をした。その中学校というのがまあ厄介で、ちょいと頭がいいぐらいでは

太刀打ち出来ないほどのエリート校だった。この国の中学生全体の、上澄みも上澄み、その零点何パーセントが、猛勉強してやっと受かるかどうかなんて、そんな学校だった。

彼女は頭が良かった。

良いだけだった。あくまで平均値以上ってだけで、普通で、普遍で、特別な才能なんてない少女だった。

当然失敗した。

失敗した時の彼女の表情を、俺はよおく覚えている。忘れられるわけがない。合格発表を一緒に見に行こうと言われて、ついていった。張り出された紙に印刷された数字をひたすら目で追う。自分の番号があるか確かめる。失敗できない。彼女にかけられたお金を考えれば、その期待の重さを考えれば、俺でもわかる。失敗したくないんじゃない。出来ないんだ。許されないから、失敗してはいけないのだ。

だから、数字がなかったとき。

どれだけ探しても、目を擦っても、なかったとき。

俺は絶望したのだ。

ああ、彼女は一体全体どうなっちゃうんだろう?! と、自分の事のように恐れ慄き背筋が凍った。殺されてしまうんじゃないかとバカな妄想に駆られたりもした。自分の番号が書かれたちっちゃい紙を握りしめながら、俺は彼女をどうすべきか、どんな言葉を投げかけるか考え考えていた。いっそ共に逃げてしまおうか、なんて、そんな事を思いついた最中。

「落ちてもうたなあ」

と、彼女はのほほんと笑った。

あ、そうだ。この時から、もうこの時期から、彼女は飄々とした関西弁を使っていたんだっけ。しゃーなしやな、なんて言いながらかははと笑った。まるで今日提出の宿題をやり忘れていた事に気がついたような、軽い軽い笑い方。ハンバーガー食べたい、言い訳考えなあかんと俺に言って、彼女は二人乗りしてきた自転車に

歩いていった。はよ来いと急かされたので、俺も慌てて歩き出した。

俺はわからなかった。

今帰ってその事実を報告したら、殺されてしまうんじゃないかと本気で思うほど、彼女の失敗は許されないものだった。寄り道してハンバーガー食いながら言い訳をあれこれ考えるよりは、速攻で帰って土下座して謝らなければならないんじゃないかと、俺が愚考するほどに。

しかしながら、彼女は笑っていた。

あーあ、失敗しちゃったかあ、どんまい。次はがんばろーねと、そう言い出しそうな雰囲気で、はよ行こうやと言った。俺が震えながら漕いだ自転車で向かったファストフード店で、フツーにむしゃむしゃ食っていた。俺はポテト一本も喉を通らなかったのに、食わんならもらうでと俺の分まで食った。いつもの彼女だった。俺が不合格だと思い込んでいるだけで、実は合格していて、俺が、勘違いしているだけなんじゃないかと思って、それでも彼女はどーしよか、とりあえず謝っとく？　なんて平気な顔して受け止めているから、現実なんだと嫌でもわかってしまって。

当たり前だけど。

その失敗を両親は詰った。

高校では間違えるなと、脅した。

その事実を、俺は中学の入学式で知った。顔に大きなガーゼを貼った彼女は心底喋りづらそうに昨日放送された映画観た？　おもろかったなぐらいのテンションでそれを語った。あの親父手加減知らんねんと愚痴った。俺は冷や汗ダラダラ流しながらそれを聞いた。彼女は彼女で高校はがんばらなあかんな、と話を締め括って、それからは一言も、両親について話さなかった。

彼女は有言実行した。頑張って頑張って、なんとか両親が認める（それでも偏差値がバカみたいに高い高校だ。俺が入学したら一日で退学になるだろう学校）に入学した。

ギリギリセーフだった。
俺はまた、震え怖がり怯えながらその報告を聞いて、今度は殴られんかったわと笑う彼女を見て、安心した。良かった。本当に良かったと、俺が泣いてしまって、彼女はなに泣いとんのと俺を笑って。
とりあえず、彼女はなんとか親の親の親の親の……とりあえずご先祖様が引いた線路の上に、戻る事ができたのだ。
問題は。
この学歴社会において。
大学受験は必要不可欠である事。
高校二年生である俺たちは、あと一年とちょっと経ってしまえば、その問題にぶち当たる事。
俺は別にいい。そんな金はないし成績も悪いから。大学なんてはなから行く気はなく、商業高校を受験したのだから。ひとり親である母親の負担を少しでも軽くするため、親孝行のため、早く働きたかった。
三条とは違う。
何もかも違う。
それでいい。互いの家庭のことをとやかく言わないのが俺と三条だ。正反対な家庭で暮らす俺と三条は、互いに互いを羨み、互いに互いを憐れみ、互いに互いを褒め称え合えば良い。それで良い。下手な同情なんてクソだ。いらない。いらない。いらない。いらない。
でも、大学。
高校よりもハードルの高いソレを、三条が失敗したらどうなるか！
俺は想像すら、したくない。
だからこそ、疑問に思う。窮地に立たされている三条の身を、誰よりも知っている俺だからこそ思ってしまう。心配する。そんな心配は三条の邪魔にしかならないと分かり切っていても、俺は余計なお世話をするのだ。

「お前、何やってんの？」
なるだけ声が震えないように、平静を装って聞いた。スマホ画面では惨状と名乗るアバターがひたすら陰謀論を語っている。過激だ。単なる陰謀論じゃない。現役の政治家の名前を出して、こいつが悪いと言っている。誹謗中傷で訴えられたらまず負けるだろう。それくらいの悪口を、政治界に限らず、それこそ商業、公共財団、国際関係の人間にも言って、悪者に仕立て上げている。
空恐ろしい。
全世界を敵に回すようなことを、三条は言っているのだから。
「何やっとんのって、言われてもなあ……見た通りのことをやっとるよ」
「みた、とおり」
「そ、見た通りや。陰謀論で金稼ぎ。またはデマ流し。ついでに特定の政治家のイメージダウン。……そうやって、はっきり言うたら満足かえ？」
「満足、じゃあ、ないけど」
こうもはっきり肯定されるとは、夢にも思っていなかったから。
三条は理解しているのだろうか？　三条がやっていることは本当に危険なことなのだ。誹謗中傷の嵐なのだ。いくら実家がお金持ちで、警察とのコネも持っていて、事件自体をもみ消せるとしても。
三条がそういったことをしたのを、両親は許さない。
中学受験を失敗し、高校もなんとか許容範囲で、その上、インターネットで洒落にならない犯罪を犯したとなれば。
嫌でも、三条の末路が、わかる。
三条は相変わらずふわふわ笑っている。それよりも俺に世界史を教える方が重要だと言わんばかりだ。自分を顧みない。自分に興味を持てない。自分を大事にできない。三条にとって、三条は心底どうでもいい存在な

のだ。
どうでもいいから、ヘラヘラ笑っていられる。
彼女の、一生治ることはない悪癖。
三条は淡々と続ける。ヘラヘラふわふわ笑っている。
「んで、それは自分にとってなんか不都合なん？　幻滅した？　失望した？　そんぐらいで切れる仲じゃないやろ。なあ？　うちは自分に干渉しない。自分もうちを妨害しない。不可侵でいよーやって言い出したん自分やんね」
「それは、そうだけど。それでも、度を越してるだろ。犯罪だ。わかってんのかよ」
「わかっとるわかっとる。危険性も何もかも、わかっとる気でいる」
「気でって、それは――」
「でも、自分には関係あらへん」
ニコッ！　と三条は笑う。流れっぱなしだった動画を人差し指で止めた。音声が消える。シ――ンと静まり返った自習室。
「……なんでこんなことしたんだ」
「なんで？　なんでと言われてもなあ」
ああ困ったちゃんだとでも言いたげに、彼女は目を伏せる。うーんと考え考え、そやなあと続けた。
「宗教ってどないして作ると思う？」
「……さあ」
「簡単や。信者を増やせばええ。それこそ荒唐無稽極まりない、御伽噺にもならんような嘘っぱちでも、信じりゃ誰かにとっての真実や。大事なのは数やね。信じるのが一人なら妄想症。十人ならカルト集団。百人なら薄らぼんやりした信憑性を持つ与太話。千人なら、一万人なら？　百万人集まりゃ立派な思想や。ねずみ算式

に増えていく人数はもう誰にも、止められへん」
「お前が止める気ないだけだろ……」
「そうともいうな」
「宗教家にでもなりたかったのかよ」
「いや？　最初は単なる興味本位。どないなるかなーって」
飄々と三条は答える。俺の言葉を受け流している場合か？　自分がやっていることの重大さを、やはりこいつはわかっていない。
それでも、俺は問う。
「最初はって言ったよな」
「……」
「じゃあ、今は？」
最初は興味本位。
ならば、今は変わっているのではなかろうか？　わざわざ最初からと前置きしたのは、今は明確な目的があるからじゃないのか？
「うーん、痛いとこつくなあ。黙秘権は使えるか？」
「使えませーん」
「けち！」
ぶーと頬を膨らませて、三条は子供のように（成人してないから子供なんだけど）抗議した。
そんな行為に意味はない。
俺はただじいっと、三条を見つめる。きまりが悪そうに目を逸らすだけ。言わなあかんかとボソボソ言いながら、それでも俺が見つめてくるから、諦めて重たい口を開いた。

「……木を隠すなら森の中やと思って」
「何それ」
「間髪入れずに聞かんといて。……まあ、あれや。うちはどうしても非難して蔑んで、たとえどんな方法を使ってもいいから支持率を下げたい政治家がおったんや。だから、そいつ以外はついで。そいつばっか非難すんのも、意味わからんから。陰謀論を効率的に使うとなると、他も非難した方がええ感じになる思うたから」
「……じゃあ、なんだ」
三条は、ただ一人の政治家を非難したいがために、危なっかしく綱渡りをしていたのか。
なんたる無駄。政治批判がしたいのなら陰謀論なんて使わずにフツーに言えば――いや、ダメか。三条が望むのは支持率の低下だから。単なる批判は弱い。マイナスな感想はそりゃ効果的だけど、それよりももっと効果的なのが陰謀論を重ね合わせて悪者にすることだから。
「だれ、それ」
「特定の名前は言わん。てか、忘れた。うちはそいつ本人が気に入らないんじゃなくて、やっとることが嫌いやったから」
吐き捨てるように三条は続ける。かつかつ、机を指先で叩きながら。
「なんでうちが支持率を下げるためだけに、あんな趣味わっるい配信やっとると思う？」
「そりゃ、有名になればなるほど認知されるから。広まる速度が桁違いになるから」
「それもある。でもそれは副作用や。有名でなくとも主語も述語もでかい言葉なんてあっちゅう間に広がるからな」
じゃあ、なぜ？
有名さはあまり関係ないのだとしたら、なぜ配信を続ける？
「ミルグラムの電気ショック実験」

「……」

「またはアイヒマン実験。権威者の命令が個人を服従させ、殺人のような大事を引き起こすようになる、そんなシミュレーション。聞いたこと、あるか？」

「ないけど、言いたいことはわかる。マニュアル対応しかしてくれない店員みたいなもんだろ？」

「それはちいと違うかもしれんけど……まあ、そやな。マニュアルを権威の一つと捉えれば、そうかもしれん。お偉いさんが言ったことだから従う。お偉いさんが命じたことだから従う。上司が、教師が、店長が、上官が、言ったから。そーいうある種の免罪符のようなもんを振りかざすと、人は犯罪すら犯すようになるっちゅう話や」

「……それで」

その話に、なんの関係が？

「だから、人々は無意識に権威に従うようにできとるっちゅう話。それはたとえば会社の上司で、担任の先生で、部活の先輩で」

それはたとえば。

——自分よりもフォロワーがいるアカウント、だとか。

「みんなが讃えるインフルエンサーの言うてることや。それも、普段はクリーンな投稿しかしていない、健全安全アカウント。そこにポンと滑り込む。入り込む。思想を織り交ぜる。どうや？　信じたくならんか？　最初からそういう思想が危険やってわかっとったら回避できるやもしれんけど、信じやすい人間やったらどうや。その人の言うてることなら間違いあらへんーって、スポンジみたいに吸い込んでしもうたら。そないな人間が一人二人と増えていったら」

あとは、簡単。

火消しができぬ段階まで、知らしめるだけ。しかも、自動的に。何もしないだけで広まっていく思想。それ

こそねずみ算で。爆発的に増えてしまったら。
「万人が信じ込んだら、それはもう真実になると思わんか？」
……そうか。
三条は嘘を真実にしたかったのだ。嫌いな政治家を追いやるために、自分の我儘を押し通すために。
危ない橋を渡った。
首が吹っ飛ぶかもしれないことを、平然と。成功するかもわからない、気が遠くなるような話を、彼女はやり遂げた。
三条は気まずそうな顔から一変。またいつものふわふわした笑顔に戻る。
「まあ、成功したから万々歳や。いえい。これで自分の生活もちっとは良くなるんちゃうん？」
……俺？
俺に、関係してることなのか？
「ん、気づいてなんだ？　動画見てくれたんやろ？　うちが批判してたのは」
全部、ひとり親向けの支援金、減らそうとしてたやつやで。
「……は、あ？」
「自分がこれ以上困らんように、ただでさえ窮屈な暮らしが窮屈にならへんように、したかった。余計なお世話かもな」
でも、お互い様やろ。
自分やって、うちのやっとることに口出して、忠告してきたやん。
「それ、は」
そうだ。
俺は大きなお世話のありがた迷惑になると知っていて、その上で三条に忠告したのだ。不意打ちみたいな形

で、言った。俺はお前のやっていることを知っているぞ、と宣言した。

三条の邪魔にしかならないことをした。

どっちもどっち。俺は俺らの生活を脅かすかもしれない政治家なんてどうでもよくて、ただ三条に幸せになってもらいたかった。三条は俺が苦しまないようにしたかった。

三条が自分を顧みることができないように。

俺だって、自分を大事にできない。

どこか変なとこで似たもの同士なのだ。俺は三条を、三条は俺を、大事にし過ぎてしまう。だから、形だけの不可侵条約を結んだ。それが一年前。

破られた。

どっちも、相手に言うことなく、破った。

元から破綻していたのだ。三条が大小問わず失敗したとき、俺は何度も一緒に逃げようと言った。実行に移したこともある。大抵隣町まで行った所で三条が冷静に帰ろ、と言ってくるから最後まで達成できなかっただけで、俺は何度も何度も何度も逃げ出した。

親不孝者になってもいいと思った。

俺を育ててくれた母よりも、三条の方が大事だったから。

三条も三条で、俺にたくさんの支援をしようとする。二人で買い物に行けば全て奢ろうとしてくるし、塾に行けない俺に勉強を教えてくれたりもする。今回の件だってそうだ。俺の環境が壊れてしまうことを危惧して、早まった。手段を選ばずなりふり構わず実行した。

俺たちは自分を大事にできない。

俺たちは相手を大事にし過ぎてしまう。

間違った正義感を振り翳して、相手の邪魔をする。

「あ、通知」
三条が呟いて、最新機種のスマホを覗き込む。
「早く帰ってこいって催促？」
「いや、配信者としてのアカウントにＤＭがきとって……んー？　なんやこいつ。『今からやります』やって。何をやるつもりなんやろうなあ」
心底めんどくさそうにため息を吐いて、三条はスマホを置いた。そういやこの自習室ってスマホなどの電子機器の使用は禁止じゃなかったっけ？　俺たち以外いないからどうでもいいけど。
「気をつけろよ。インターネットにはお前の陰謀を信じてくれる素直ちゃんばっかじゃねえんだからさ」
「わかっとるわかっとる。てかこいつはマトモな方や。開口一番性的なお誘いをしてきたやつもおるんやからな」
「おえ」
俺はべーっと舌を出す。画面の向こう側の人がどう思うか考えないのだろうか？
なんだか勉強をする雰囲気でもなくなって（陰謀論の話をし始めた辺りからそうなっているけれど）俺はスマホを手に取った。適当にＳＮＳのアイコンをタップして、タイムラインを見る。
……なんだ？
俺はなんとなくいつもと違うタイムラインに困惑し、これまた無意識にトレンドワードを確認する。
「……なあ、三条」
「なんや。うち、次の配信のネタ探すんに忙しいんやけど」
「これ」
俺はニュースサイトに飛んで、速報の文字が踊る記事をタップする。
どうやら。

政治家がナイフで刺されて、死んだらしい。
移動中のことだった。一瞬の隙をついて政治家は刺された。心臓をまっすぐ狙っていた犯人によって、殺された。
取り押さえられ現行犯で逮捕された犯人は、そいつは人間に化けたヒト型爬虫類で人工地震を引き起こしワクチンに毒を仕込んで通信技術で思考を読み取りテロを見逃して、たくさんの人を殺してきたんだと。これからもたくさんの人が犠牲になるから、止めたのだと言っているらしい。
犯行時刻は、三条にＤＭが届いた時。
「……さん、じょう」
この惨状を作り出した彼女は、どうするつもりなんだろう。
人が死んだ。嫌いだから、支持率を下げるため、あることないこと振り撒いた結果、殺してしまった。
ミルグラムの電気ショック実験。
権威者になった彼女は、自らの権威の大きさに気づいていなかった。
「……アー」
三条は。
「やり過ぎてもうたなあ」
のほほんと笑った。
あの時と同じ笑い方で、俺に向けて。ああ、やっちゃったなあと、軽く軽く考えているみたいに。自分を大事にできないから、自分がやったことの重みを理解できなくて、だから、彼女は。
これから自分がどうなろうが、どうでもいい。
「とりあえず、ハンバーガー食い行こ」
言い訳も考えなあかんし――と、彼女は席を立つ。はよ行こ。そろそろ図書館も閉まる頃あいやから、ちょ

うどええやろ。何食うたろかなあ。ワンチャン最後の晩餐やもんね。
なんて。
彼女は、あの時とおんなじように、俺に微笑んだ。